

草原

の記

司馬遼太郎

新潮社

草原の記

司馬遼太郎

新潮社

草原の記そうげんき

著者 司馬遼太郎しばりょうたろう

発行 一九九二年六月二〇日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 営業部(03)三二六六―五一―
編集部(03)三二六六―五四三四

振替 東京四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社



価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社
読者係宛お送り下さい。送料小社負
担にてお取替えいたします。

帰ってくる話・
178

虚空・
151

雲・
115

城市^{まち}・
88

黒い砂地^{カラ・コルム}・
57

シベリアの煖炉・
32

匈奴・
5

題字
司馬遼太郎

草原の記

匈奴

空想につきあっていたきたい。

モンゴル高原が、天にちかいということについてである。

そこは、空と草だけでできあがっている。人影はまばらで、そのくらは天に棲んでいるとしかおもえない。

すくなくとも、はるか南の低地にひろがる黄河農耕文明のひとびとからみれば、おなじヒトの仲間とおもえなかつたろう。しかも、馬にじかに乗っている。騎乗して風のように駆け、満月のように弓をひきしぼり、走りながら矢を放つ。

——あれは、人ではない。

と、紀元前、黄河の農民はおもった。

その集団は蒼穹^{あおぞら}が接するほどにたかだかとした大地に住み、羊の群れとともにうごき、ときにはるかに漠庭^{ばくてい}をこえてやってきては——北方の側にも言いぶんがあるが——農業帝国の穀物や衣^{きぬ}をかすめとった。かれらのことを、ひとびとは匈奴^{きょうと}とよんだ。

匈奴を、どうふせぐか。——以下のことは二千数百年前の戦国末期、趙という国でおこったはなしである。

趙とは、いまの中国山西省の北半分から河南省のあたりを領有していた国で、戦国における七強のひとつだった。

もしいま高度の上空から見おろすとすれば、その趙、いまの山西省は泥をかため

たような灰色の裸山の波で、月世界のような印象をうける。黄河文明圏（漢民族）の最北端の、いわば前線国家だった。

もつともまれに溪流があつまつて黄土層をうるおす緑地があり、そこで農業がいとなまれた。太原とその付近が緑地の代表的な土地で、春秋戦国のころは晋陽といい、趙の時代、農耕王国としてのその国の中心をなす穀倉のひとつだった。

私どもになじみ深い地名でいえば、趙の北辺が、いまの大同である。

大同となると、もはやモンゴル地帯に近い。

趙の時代では、匈奴地域とむかいあい、いまも、中国側の内モンゴル自治区（いわゆる内蒙）に接している。

そのあたりを上空からみれば、大地は煎^いった小麦粉のように黄色く、そこに東北にのびている線を見ることができる。万里の長城である。

長城こそ遊牧国家と農業国家のせめぎあいのしるしであった。もし斜陽の時刻にその上空を飛ばせば、長城が濃いかげをひき、乾燥した遊牧世界と、湿潤な農業世界とを、地球規模で区切っていることに気づかされる。その外と内では、すべてがち

がう。

“内”ではなしをつづける。趙のことである。

「いっそ、軍事や軍装を匈奴に真似ようではないか」

趙の王である武靈王^{ぶれいおう}がみずから考えた。

やがてそのように決断した武靈王の生年没年はわからないが、在位は『史記』の「趙世家」では、紀元前三二五年から同二九九年までとある。

かれの在世中の知名人の名をあげると、初期儒教を説いてまわった孟子がおり、また自在な立場で外交戦略を列強に説き歩いた蘇秦・張儀の徒がいた。秦では法家の体制をとり、さらには長江のほとりの楚では憂国の詩人屈原が出た。中国思想上、もつとも華麗な時代といっている。

趙の絶えざるくるしみは、遊牧国家の匈奴と境いを接していることであつた。そのくるしみからいえば、孟子などの説く儒教などは迂遠きわまりない。礼など、な

んの足しになるだろう。

儒教は、異常なほどに文明主義であつた。

その教えにあつては、文明の基本の一つは礼であるとされる。さらには、礼の根本は服装にあるという。たとえば裸をいやしみ、もし裸で歩けば野蛮人（夷狄）とされる。

また貴族や官吏階級を「君子」とよび、「君子」たる者は冠をつけ、制（とりきめ）どりの服装で威儀を正さねばならない、とされていた。

匈奴のような夷狄にはそれがなかったためにけもののようなものとみなされた。

趙の武靈王は現実派というべき立場で、そんなことはどうでもよかった。

夷狄はいやしい。これを積極的にいやしむのが文明主義というものだ、と儒者たちはいうが、趙にとっては、その夷狄（この場合、匈奴）が、毎年の行事のように秋から冬にかけての季節、大挙南下してきては農村を襲い、略奪して去ってゆくのである。そのつど趙の軍隊は敗けた。

趙の武靈王がゆきついた結論は、匈奴と戦うためには、かれらの戦闘法や服装を

まねようということであつた。

長城の「内」である中国語は、ことばは単音節である。

大いにやろうと衆に話しかける場合、単語四個が、一叫の呼吸になる。武靈王は、「胡服騎射」をとらえた。胡服を着、騎射しようではないか。

ついでながら、胡というのは、戎や夷や蛮、狄と同様、野蛮人をさす。

さらにいえば、文明圏である黄河人の服装は、古来、袖やすそがなく——とくに貴族や官吏の場合——寛やかで、活動的でなかった。

これに対し、北方の胡服は人体の運動のためにしつらえられていて、平時も戦時にもかわりがなく、袖がほそく筒状で、長い脚衣をはき、ひざから下は長靴でおおい、こんにちの洋服の源流をなしていた。

脚衣についてだが、ごく一般的にいつて、これには世界語がない。明治後の日本では長い脚衣のことをズボンとよんできた。

ただし、ズボンは何語からきたのかはよくわからない。

ときにフランス語のジュポン（女性用の下ばき。ペティコートの類）からきた、とされるが、男物であるズボンと女物の下着であるジュポンとは物としてかけはなれている。

語源がわからないこともあって、日本語のズボンは時と場合で言いかたが不安定で、スポーツ用のズボンでは英語のスラックスが借用されたり、フランス革命後に流行したパンタロンが、いまではある種の女用のズボンにかぎってつかわれたりする。またアメリカ語のパンツという語も汎用されるようになっていた。

もつとも、ズボンは、明治初年、両脚をずぼんはと入れて穿くことからはじまったともいう。存外それがほんとうかもしれない。

要するにズボンは、趙の武靈王がいうところの胡服の一特徴だった。

——ズボンはこう。

と、武靈王は提唱した。当然ながら王族をふくめて多くの人々が反対した。文明を捨てて野蛮にしたがうのか、とひとびとは口々に言いさわいだ。

さきに、ズボンのことから日本のことにふれた。幕末、幕府の要請によって長崎にきて海軍を教えたオランダ王国の海軍少佐ファン・カッテンディーケは、その回想録のなかで、生徒である幕臣や諸藩の士が、艦上でも大小を腰にたばさみ、和服をすてず、袴をはいていることにくびをかしげた。なぜあんな非活動的な服装に固執するのか。

カッテンディーケがみた日本の服装のなかで、いちばん機能的だったのは、紺の股引・腹掛・半纏（はらひき・はらかけ・はんでん）といった職人のなりだった。

しかし幕臣たちにとって、腹掛に股引をはいたりすれば、武士であることの全身分を失ってしまう。

それをすてさせるには、明治維新という大がかりな革命が必要だったことをおもうと、趙の武霊王が直面した困難が理解できなくはない。

『史記』によると、武霊王は、群臣に対し、漢民族の服制が歴史的に不動ではなかったことを説きに説いた。また叔父が反対して病いとなえて門をとじたのに対し、みずから叔父の屋敷に出むいて理由を説明したりした。

さらには、太子の師の周紹という老人にも説いた。この老人には胡服と、それに付属する服装品である貝帯ばいたいと黄金の師比しひを下賜（『戦国策』）したりもした。

胡服（いまのモンゴル人の服装でもある）の上衣は、いまのレインコートに似ていた。当然ながら上からベルトで締めねばならない。馬上での活動のためである。そのベルトが、右にいう貝帯であった。かざりとして貝が用いられていた。

次いで、師比。

この場合、師比ということばがゆゆしい。

シビというのは匈奴語（いまのモンゴル語やトルコ語をさかのぼった言語）で、師比とはそれに漢字をあてはめただけである。古来たいてい帯鉤たいていと訳される。匈奴は剣をつるすために革帯を着けていたが、シビとはその革帯の止め金がねのことであった。

匈奴のベルトの構造における止め金（シビ）は、はるかにくだって十九世紀のヨーロッパの軍隊の士官服に使われ、ひるがえっていうと、旧日本陸軍でも見習士官

以上がこの止め金を用いていて、いわば士官であることの小道具の一つとされた。

ついでながら、師比という語は一説によるとサーベル（長い西洋式騎兵刀）の語源であるともいう。

以上、私ははなはだのどかに書いている。

主役は、私が草原で出会ったツェベクマさんという女性なのである。しかしまこのように列島の一隅で彼女のことを思いだすとき、滑稽におもわれるかもしれないが、このひとを載せているモンゴル高原について書かねば、私の中で彼女が鮮明になって来ないのである。

筆者は、職業上、小説家に分類されている。従って書くものはことごとく小説として分類されるものでありたいとねがっているものの、しかし小説の概念のほうをそれをゆるさない。

小説とは、かりに定義をいうとすれば、美学的に秩序づけられた妄言といってよく、その意味では、ここに書いていることもまたとりとめもない。